

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 25 日現在

機関番号：14503

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23402041

研究課題名(和文) 移動とモダニティ現地化の日中比較による公共圏と親密圏の再編と統合に関する実証研究

研究課題名(英文) Empirical study about the reorganization and integration in public sphere and intimate area through the Japan-China comparative analysis of social movement and modernity localization

研究代表者

首藤 明和 (SHUTO, Toshikazu)

兵庫教育大学・学校教育研究科(研究院)・准教授

研究者番号：60346294

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 9,600,000円、(間接経費) 2,880,000円

研究成果の概要(和文)：ハイブリッドモダンの社会学の実証的課題として中国と日本の移動を調査し、以下の知見を得た。(1)グローバル化下でのモダニティと土着の相互交渉では、社会や文化の蘇生、再生、転生といった循環的な社会変化が特徴的である。(2)周辺化された人びとの共同性は、起源や独創性など自己の同一性や一貫性に固執せず、むしろ境界侵犯性を常態として受け入れ、異質な他者との相互作用を枠づける規範や実践を含んでいる場合がある。(3)アジアの市民社会では、移動に関連した規範・実践とマジョリティとの相互交渉が新しい市民活動を生み出す。(4)移動は女性のネットワークを活性化し親密圏を外部に開くことで市民社会の再編を促す。

研究成果の概要(英文)：The field survey of the social movement of China and Japan was carried out for the purpose of elaboration of hybrid modern sociology, and the following knowledge was acquired. (1) Cyclic societal changes in mutual negotiation of the modernity and nativeness under globalization, such as revival reproduction or transmigration of society or culture, are characteristic. (2) The cooperation of people who are in a fringe status does not persist in self identity consistencies, such as the origin and originality, but accepts boundary invasion as a normal state rather, and it contains the framework of the interaction with a heterogeneous person. (3) In the civil society of East Asia, the mutual negotiation between the majority and the norm and the practice relevant to movement produces new civic activities. (4) Movement is activating a female network and opening the intimate area outside, and urge reorganization of civil society.

研究分野：複合新領域

科研費の分科・細目：地域研究

キーワード：社会学 ハイブリッドモダン グローバリゼーション 移動 公共圏・親密圏 地域・文化圏 少数民族 共生

1. 研究開始当初の背景

近代を支えるモダニティ構造は両義性を特徴とする。しかしモダニティは、生成した地を離れて他の地へ移植されると、その両義性が不均衡化するだけでなく、移植先で根付こうとして第三項を新たに出現させる。例えば、政治領域のモダニティ構造は、「民主化」(在民主権)と「中央集権化」(国家主権)の両義的要素からなるが、モダニティの移植とともに、ナショナリズム、民族主義、開発独裁などの第三項を現地に独特な形で展開させたりする(厚東洋輔(2006)『モダニティの社会学』ミネルヴァ書房)。

今日のグローバリゼーションとは、モダニティとの交渉やその現地化を不可避に逼ってくるものであり、そうした「モダニティの現地化」メカニズムの解明が、現在を生きる私たちにとって喫緊の課題である。

東アジアの抱える諸問題を解決し、平和と相互理解に基づく将来を実現していくためには、「モダニティが普遍的に要請する規範」と「モダニティの現地化を通じて生じた現実」のズレを、どのように理解し解決していくのが重要である。また、その考察のための方法論的規準の設定も重要な課題である。

2. 研究の目的

身体性と人称性を尊重した相互承認と相互支援のなかで、誰に対しても居場所が開かれた社会を実現するためには、東アジアの地政学的な意味を自覚しつつも、学術的な問題関心の設定を自ら行い、社会文化構造や「越境」をともなう移動などから、東アジアをひとつの地域として解明することが必要である(北原淳編(2005)『東アジアの家族・地域・エスニシティ』東信堂)。そして、確かに様々な意味で問題を孕んでいるアジアの市民社会であるが、グローバリゼーションにおいて、それぞれの規範性と事実性に下支えされた市民社会は、現在を生きる人びとにとって不可避かつ不可欠であり、それゆえ、公共圏と親密圏について、弛まない批判的考察が必要である。

本研究の目的は、(1)非西洋の近代化やグローバリゼーションを「モダニティの現地化」と捉える「ハイブリッドモダンの社会学」の精緻化を目指すこと、(2)「ハイブリッドモダンの社会学」と関連した実証的課題として、中国と日本の「移動」と「モダニティの現地化」の比較をおこなうこと、(3)「移動」を組み込んだ相互承認と相互支援のモデルを打ち立てるにあたって、市民社会の規範性だけでなく、日本や中国の歴史・文化にルーツをもつ「共同性」が、どのような形で市民社会の親密圏や公共的空間の再編に貢献しているのかを、批判的に検討することである。

(3)の東アジアの「共同性」をめぐる議論で

は、かつて、収斂的、同化主義的な近代主義の観点から、「封建遺制」として一律的な負のラベルを「共同性」に貼ってきたこともあった。また、「脱亜」や「興亜」といった同意対立物に過ぎないアジア認識のなかで(E. サイドが「オリエンタリズム」でいうような、他者を支配し再構成し威圧する「支配の言説」である。ここで構築された他者としてのアジアは自己としての日本から切り離され、かつ、構築された他者像に対してその他者自身は合意する機会すら与えられない)、アジアの「共同性」の“利用法”が考えられたりした。一方、東アジアの市民社会の成熟を実現するためには、既存の近代主義イデオロギーや、「脱亜」「興亜」などモダニティの帝国主義的、植民地主義的撰取と関連したセルフ・オリエンタリズムとは異なる視点から、東アジアの各地で各様の「共同性」について、クリティカルに再考する必要がある。

3. 研究の方法

本研究の分析枠組みは以下の通りである。

(1)今日のグローバリゼーションでは、モダニティと「土着」との交渉を経てなされるモダニティの現地化が、生活の隅々にまで及んでいる。また、東アジアの近代化も既に150年ほどの歴史を有するようになっており、単にモダニティと「土着」の相互交渉だけが行われるのではない。むしろ、現地化された古いモダニティと新しく伝播してきたモダニティの相互交渉や、蓄積された古いモダニティ自身の変容も視野に収める必要がある。本研究の分析の力点は、そうした重層的で多義的な「モダニティの現地化」に置かれている。

(2)「公共的空間」(不特定多数の人びとによる、特定の場所・課題を超えた言説空間)は複数の「公共圏」(特定の人びとによる、特定の場所・課題をもった言説空間)から構成されるという視点(齋藤純一(2000)『公共性』岩波書店)を採用し、東アジアの文化や歴史にルーツをもつ「共同性」を「公共圏」や「親密圏」の再構成において参照できるように、その道筋を方法論的に確保した。

(3)ナショナリティがシティズンシップよりも優位に立つ「国民的市民社会」や、周辺化された「二級市民」を排除しつつ包摂する「身分的市民社会」など、東アジアの市民社会が抱える問題は大きい。こうした問題を解決するために、本研究では、「移動」がもたらす多様性や異種混濁性、境界侵犯による境界変容などに着眼した。また、特に中国社会については、歴史的に移動を常態としてきた「少数民族」に着目し、「固有の領土」の形成や「信仰の自由」の獲得などモダニティの現地化にかかわって、「少数民族」がいかなる役割を担ったり、「意図せざる結果」を導いてきたりしたのかにも着目した。

これら分析枠組みに基づいて、実際に以下

のような現地調査を実施した。まず、中国での現地調査についてみておこう。

(1)山西省平遥市郊外村では、家族・親族のネットワークや冠婚葬祭における互助、財産相続、宗族の組織化とその機能、農作物の見張り(看青)をめぐる共同性、廟会やカトリックなどの信仰、演劇や歌唱などの芸能などについてインタビュー調査を実施した。ここから、特に民国期から集団経済期までの移動と関連させつつ、地域社会の構造と人びとの生活の考察をおこなった。また、山西大学社会史研究所の支援を得るなかで、ひとつの行政村の10の生産隊について、大躍進期及び文化大革命期の戸籍簿と世帯ごとに作成された階級成分表の収集を行い、人民公社時代における移動の管理・統制や、主体的あるいは受動的な移動が人びとの生活や意識にもたらした影響、移動をめぐる地域社会の規範の変容などについて分析した。

(2)黒竜江省ハルビン市、吉林省長春市、遼寧省撫順市、寧夏回族自治区におけるモスクの調査では、ムスリムのトランスナショナルネットワークと、それがもたらす社会関係資本の蓄積や動員を、養老や貧困問題への取り組みと関連させて分析した。

(3)雲南省保山回族自治県の調査では、馬注思想の振興に着目した。すなわち、保山生まれの馬注(1640-1711)は、王岱輿、劉智、馬徳新とともに中国イスラーム思想の四大経学家のひとりに数えられ、主著『清真指南』では、一神論を堅持するとともに、イスラームと儒学の間を漢語で注釈し、「孝道」「人道五倫」など儒学の社会的機能を評価しつつ、イスラームのそれと同一とした。また、宗教は時と場所に依りて旧来の制度、慣習、方法などを自ら革新するものと考え、「權教」(変化の内容)と「因教」(変化の方向)を思索した。ここから、ムスリムは「真主」と「君主」双方に忠実であるという「聖俗並存的信仰体系」が編み出され、今日の「愛国愛教」に連なる「二元忠貞」(二元忠実)の二重信仰形態の祖形を形作った。清朝末期の漢族による大虐殺や、文化大革命期の回族文化の破壊などを経験した保山回族であるが、現在は馬注の思想を通じて自己を表象し、まちづくりをおこなったり、漢族との共生を図ったりしている。漢族もこうした回族の文化運動を支持しており、馬注の思想と文物が、国内外ムスリムの観光の呼び水となることも期待されている。このように、中国国土の周辺に位置する雲南省保山の調査では、回族を通じて、「固有の国土」の形成や、信仰の自由の獲得、あるいは苦難の歴史を越えた「逆説を含んだ共生」などについて分析した。

(4)内モンゴル錫林郭勒盟東烏珠穆沁旗額吉淖爾鎮のモンゴル族の調査では、改革・開放以降の土地請負制の導入による遊牧の否定と牧場経営の本格化、それともなう表土の荒廃と砂漠化、度重なる冬季雪害と乾草(飼料)不備による家畜への甚大な被害、石

炭採掘による牧民の生活破壊と生態移民、牧畜を環境破壊の元凶と見なす中央政府の酪農導入政策とその失敗など、移動を制限されたモンゴル族が直面している生活、アイデンティティ、生存などの危機を明らかにした。同時に、これらの危機を解決して将来を切り開いていくために、モンゴル族ネイティブ住民が漢族や地方政府などの支援も得ながら、哈日高卒牧業合作経営協会を設立し、伝統の再編(社会関係やそれをささえる実践的文化の再生)を通じて牧民の生活を保障し、文化の復興を図っている姿を明らかにした。

(5)山東省青島市では、都市農村結節部における都市化事業、政府・ディベロッパーによる土地所有権買上げにともなう住民の騒動、コミュニティや家族親族ネットワークの再編、農村市場の発展、住民の移動(地域や職業)について調査し、資本や権力がもたらす受動的あるいは場合によっては主体的な移動から、現代中国の都市近郊村が抱える親密圏と公共圏の問題について考察した。

(6)民国時代中国武術の資料を台湾国立図書館や台北での現地調査などで収集し、武術を通じた師弟関係など伝統的な社会的ネットワークや、武術が国技として再編される過程に着目し、国民的な市民社会の形成過程について分析した。

次に、日本の現地調査についてである。

(1)奈良県吉野と三重県松阪を結ぶ交通の要衝であった飯高町では、神楽経験者、畜産経験者、林業経験者に聞き取りを行い、芸能、産業を介した地域移動について情報を得た。伊勢神楽は、近畿から中国地方にかけて広範囲を移動する芸能集団であり、そうした外部から来訪する神楽が、各地域行事の中に組み込まれていたことを確認した。松阪牛の家畜商については、近畿一円にわたる地域移動のなかで、種牛である但馬牛等の詳細な情報を把握し、それを元に松阪の肥育農家への橋渡しを行っていること、また日本を代表する「和牛」が伝統的な人的ネットワークを地盤としながら創出されたプロセスを把握した。

(2)兵庫県北部において、最大規模の自治会である豊岡市西花園、下陰および最も古い町場である中町の調査から、次の点が明らかになった。いずれの自治会ももともと小さな町、村であったが、近代以降、西花園は鞆産業の隆盛とともに、主に豊岡近辺の村から人口を吸収して成長し、下陰は宅地造成として、但馬一円からの人口流入によって急拡大した。この中で、自治会は流入層によって組単位の互助組織の再編が進み、新住民を組み込んだ地域構造へと転換を遂げた。商人町であった中町は、但馬を超えた範囲で複数の地域関係、人的繋がりを保持していた。豊岡の形成契機となった中世期の武将宮部氏を縁故とした滋賀県宮部町住民グループとの親交は、400年祭や災害見舞い等を通して再確認され、双方の地域アイデンティティを支え、象徴的な権力作用を生み出していた。

(3) 広島県三次市(備後北部)では、地域の草分けで庄屋筋、名望家であった旧家の、親子四代にわたる日記資料などを収集し、江戸末期から昭和にかけての移動と家族親族ネットワーク、地域社会の運営について分析した。特に、江戸末期の年貢減免をめぐる村を越えた人びとの糾合と権力側の対応、その後の農民指導者に対する所払いの処置と、これに対する地域住民からの刑減免の嘆願、こうした背景をもつなかでの分家創設の経緯、御一新をめぐる地域社会の混乱と再興、明治初期の大区小区制のなかでの戸長や副戸長としての役割、地租改正をめぐる地域社会の動揺と再編、戸長職を担う上で生じる経費捻出のため、あるいは学制施行後の子弟への学費捻出のための家産処分、分家からの大量のブラジル移民排出、家族や親せき筋の都市部への移住、「家」(屋敷、屋敷地、家墓、仏壇)を残して、大阪などの都市に居住する子孫たちの意識や行動などについて分析した。

(4) 和歌山県の高野文化圏ではフィールドワークと歴史資料の調査をおこない、移動、生産、流通を契機とした地域文化圏の形成や分業体制を明らかにした。すなわち、高野山は聖域であったことから、農業などの第1次産業がおこなわれていなかった。その一方で、周辺地域との経済的な分業体制が成立しており、高野山に農産物などを供給していた。その名残として周辺の集落では高野山に野菜などを納める雑事登りがおこなわれていた。さらに信仰面では、高野山に遺骨を納める骨登りが高野山を中心として大阪南部までおこなわれており、地域文化圏内において人と物の移動がおこなわれていた。また予祝儀礼である御田や鬼や傘鉾が登場する盆行事などが周辺に分布している。高野山を中心とした文化圏は周辺地域だけではなく、真言宗の寺院を媒介として全国に及んでいる。高野山への参詣は全国に及び、また仏具も高野山の仏具店から全国の真言寺院に送られている。近世以前の高野山は女人禁制であり、人口再生産することができず、全国からの流入人口によって維持されてきた。

4. 研究成果

非西洋の近代化やグローバル化を分析する「ハイブリッドモダンの社会学」の精緻化を目指すなかで、実証的な課題として中国と日本の「移動」に着眼した現地調査を行った。そして、「移動」を組み込んだ相互承認と相互支援のモデルを打ち立てるために、日本や中国の歴史・文化にルーツをもち通時的に変遷していく「共同性」が、どのような形で今日的な市民社会の親密圏や公共的空間の再編に貢献しうるのかを検討した。その結果、以下の知見を得た。

(1) 近代化やグローバル化におけるモダニティと土着との相互交渉において

は、社会や文化の蘇生、再生、転生といった社会変化、文化変容が特徴的である。こうした循環性のなかで、価値や生き方の創造や革新が生じている。本研究の現地調査からは、信仰、民族、政治的迫害や連行、芸能、流通、婚姻など、多様な要因や形態による「移動」が明らかになったが、これら「移動」は、社会システムの境界を行き来することで、場合によっては社会や文化の開放的側面を表象するだけでなく、加えて、社会システム間での相互作用による共变的側面も活性化する。例えば雲南保山の回族文化や社会は、清朝末期の虐殺や文化大革命の政治的迫害のなかで一端は眼前から消失した。しかし、現下のグローバル化のなかで「移動」が活発化し、「移動」を媒介とした文化や社会の転生や蘇生が進行すると、再び、回族文化は、回族の人びとの価値や生き方に直接的明示的な影響を及ぼすようになっている。また、まちづくりにおいては回族文化の発揚を通じて、漢族との共生や地域の安定、生活の向上なども図られており、「共生のパラドックス」(塩原勉, 1994, 『転換する日本社会』新曜社)と呼べるようなメカニズムが働いていることにも注目される。

(2) 社会変化や文化変容の循環性、あるいは社会システムの開放性や共变性といった特徴は、中国や日本の社会において周辺的な地位にある人びとの共同性によって支えられている部分が多い。この共同性は、異質な他者との相互交渉を枠づける規範や実践を有している。すなわち、異質な他者を異質なものとして承認し支援する心性や作法を支えたり、起源や独創性など自己の同一性や一貫性に固執せずむしろ境界侵犯性を常態として受け入れたり、あるいはたとえ自己の同一性を再構築する場合でもそこに異質な他者との相互行為をめぐる原則を持っていたりする。こうした周辺化された人びとの持つ共同性の規範や実践は、「定住」を軸とした社会や文化、あるいは「定住」を前提とした社会認識からは抽出できないものである。

(3) アジアの市民社会では、「移動」に関連した諸特徴を内面化した地域や人びと、すなわち社会や文化の循環性、開放性、共变性を色濃く体現した地域や人びとは、むしろ周辺的地位に置かれる傾向がある。場合によっては「二級市民的」な扱いを受けることも少なくない。しかしその一方で、こうした「移動」の規範と実践を担う人びとが、困難や苦痛を乗り越えて、かつマジョリティとの相互交渉を開放的、共变的に積み重ねていった場合、新たな価値や生き方につながる「市民活動」を創始したりする場合も少なくない。今日の中国の市民活動をみれば、その重要な契機のひとつは、農村からの都市出稼者たちと都市住民との相互交渉にある。また、周辺化された「少数民族」が、その信仰や越境的な社会的ネットワークを背景にして、市民社会において革新的な市民活動を起こすケースも

ある。日本でも、コミュニティ・ケアや多言語コミュニティ FM 放送などの創設や制度化では、市民社会のなかで周辺化された「主婦」や、ポストコロニアリズムに深くかかわらざるを得ない大阪生野区在日コリアンなどが大きな役割を果たしている。

(4)「移動」は家族や親族の伸縮性を活性化させる。特に東アジアでは、伝統的に父系親族の規範が強く影響してきたが、現在においては、双系化を導く女性の社会的ネットワークの活性化が、親密圏に閉じこめられた家族を外に開いていく原動力となり、親密圏の原理を活かすなかで市民社会の再編を促している。また、女性の社会的ネットワークは、双系化のなかで家族・親族のもつ資源をより多く取り込み、個人が家族の一員としてそのライフを送ることを可能にしている。さらに、政府による福祉政策やボランティア活動支援なども女性の社会的ネットワーク活性化と連動しながら展開している。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者には下線)

[雑誌論文](計 8 件)

福田恵、「都市社会における共有地の形成局面——大都市近郊と地方都市の地域関係網に着目して」日本村落研究学会編『年報村落社会研究』第 47 巻、2011 年、118 - 155 頁、(査読有)。

首藤明和、「東日本大震災とその後——災害・復興・防災の日中比較を通じた新しい社会の模索」日中社会学会編『日中社会学研究』第 19 号、2012 年、1-12 頁、(査読有)。

首藤明和、「回族の宗教実践と『中国』」神戸大学社会学研究会編『社会学雑誌』第 29 号、2012 年、66 - 85 頁。

首藤明和、「ハイブリッドモダンの日中比較研究序説」日中社会学会編『日中社会学研究』第 20 号、2012 年、9-20 頁、(査読有)。

福田恵、「狩猟者に関する社会学的研究——イノシシ猟を介した社会関係に着目して」『共生社会システム研究』第 7 巻 1 号、2013 年、223-255 頁、(査読有)。

首藤明和、「費孝通」(社)社会調査協会編『社会と調査』12 巻、2014 年、104 頁。

首藤明和、「現代中国家族の変化と展望」愛知大学現代中国学会編『中国 21』第 40 巻、2014 年、233-252 頁、(査読有)。

池本淳一、「チャイニーズネス構築における対立と困難——民国期武術団体・中央国術館を例に」日中社会学会編『日中社会学研究』第 21 号、2014 年、6-16 頁、(査読有)。

[学会発表](計 24 件)

森本一彦、「絵系図譜にみる社会関係——東

近江市伊庭妙楽寺の事例」日本民俗学会、2011 年 10 月 2 日、滋賀県立大学。

池本淳一、「中国における伝統文化を通じた社会的ネットワークの形成」日中社会学会、2011 年 6 月 5 日、関西学院大学。

首藤明和、「東日本大震災とその後——災害・復興・防災の日中比較を通じた新しい社会の模索」日中社会学会・北京日本学術研究センター共催「国際交流基金『知的交流会議助成プログラム』」、2012 年 2 月 18 日、東北学院大学。

首藤明和、「ハイブリッドモダンと日中比較」日中社会学会、2012 年 6 月 2 日、立命館大学。

首藤明和、「中国『回族』研究の課題と展望——移動・宗教実践・ハイブリッドモダンの視角から」日中社会学会研究集会、2012 年 9 月 15 日、名古屋大学。

森本一彦、「社会生活からみた能登川の民俗」東近江市史能登川の歴史発刊講演会、2012 年 5 月 13 日、やわらぎホール。

森本一彦、「地縁社会と生活遺産」シンポジウム「生活文化の再発見に向けて——伊都の歴史・民俗・文化」、2012 年 12 月 22 日、高野町公民館。

福田恵、「林野研究の展開と農村社会学の射程——戦前期日本における農村研究の再検討(4)」日本社会学会、2012 年 11 月 4 日、札幌学院大学。

池本淳一、「Strategies of Identity Construction in Post-Lost Generations: The Case of Young Boxers in Japan」, Workshop on Cultural Identity and Culture Protection: Asian Practice (The 6th Asian Forum (2012)), 2012 年 12 月 2 日、中央民族大学(北京)。

首藤明和、「在村的潮流からみる明治期日本のハイブリッドモダンの生成と展開

——ハイブリッドモダンの日中比較に向けて」長崎大学重点研究課題「東アジア共生プロジェクト」、2013 年 2 月 22 日、長崎大学。

首藤明和、「現代中国の「家族問題」——「家族圏」を通じた現状と課題の考察」日中社会学会、2013 年 6 月 2 日、成城大学。

首藤明和、「The Feature of the Hybrid-modern in Japan」“現代性と当代人的精神生活”国際学術研究会、2013 年 7 月 28 日、吉林大学(中国)。

首藤明和、「東アジアのグローバリゼーションとその課題・展望」成城大学国際シンポジウム「グローバル研究と多文化社会論の交点」、2013 年 12 月 8 日、成城大学。

首藤明和、「中国西南部・雲南の回族からみるイスラーム世界と『中国』」長崎大学重点研究課題「東アジア共生プロジェクト」、2013 年 12 月 15 日、長崎大学。

森本一彦、「大学研究室所蔵の社会調査報告書のデータベース化の諸問題」関西社会学会、2013 年 5 月 19 日、大谷大学、招

聘講演。

森本一彦、「地域資料アカイブ化の諸問題 - 京都大学と高野文化圏の事例から」、史料と伝承の会、2013年9月14日、明治大学。

森本一彦、「高野文化圏の多様性を考える」、高野文化圏研究会シンポジウム、2013年9月17日、高野山大学。

森本一彦、「地域文化圏の可能性 高野山を中心とする文化圏研究を事例として」、日本民俗学会第65回年次大会、2013年10月13日、新潟大学。

福田恵、「近代日本における山村社会の移動とネットワーク 林業移動の事例から」、長崎大学重点研究課題「東アジア共生プロジェクト」、2013年2月22日、長崎大学。

池本淳一、「日中両国における文化実践を通じた若年層のアイデンティティ構築と再生産の戦略 日本のボクシングジムと中国の武術学校を事例に」、日中社会学会・北京日本学研究会センター共催「国際交流基金『知的交流会議助成プログラム』」、2013年3月23日、筑波大学東京校舎。

⑳池本淳一、「国家主導のチャイニーズネス形成とその困難 民国期の武術団体・中央国術館を事例に」、日中社会学会、2013年6月2日、成城大学。

㉑首藤明和、「The Hui People's Religion practices and 'China'」, The Asian Studies Association of Hong Kong (香港アジア研究学会)、2014年3月14日、香港大学。

㉒森本一彦、「高野文化圏における資料保存の可能性と課題」、2014年1月18日、奈良県婦人会館。

㉓福田恵、「越境する山村研究の現在 解題」、日本村落研究学会関東地区研究会、2014年3月31日、明治大学。

〔図書〕(計 10件)

森本一彦、高野町編纂委員会編『高野町史』民俗編、2012年。

森本一彦、『東近江市史 能登川の歴史』第4巻 資料編(文献・民俗)、2012年。

福田恵、「農村の社会」千賀裕太郎編『農村計画学』朝倉書店、2012年、8-11頁。

首藤明和、「中国西南部・雲南の回族からみる地方的世界の構造 『自然村』(コアコミュニティ)と『社会圏』(接合的コミュニティ)に着目して」藤井勝・高井康弘・小林和美編『東アジア「地方的世界」の社会学』晃洋書房、2013年、262-282頁。

首藤明和、「“逆境之力”創造相互援助型社会 從阪神淡路大地震思考東日本大地震の今后」陳立行・宋金文・首藤明和・田毅鵬編『地震・救援・重建的中日比較研究 全球化与社会關係資本的視角』吉林文史出版社、2013年、133-151頁。

首藤明和、「近世受岐視群體的社会結合与日本の現代化再考 着眼于以郷為基礎

的“草場株(股)”等社会結合」首藤明和・王向華・宋金文編『中日家族研究』浙江大学出版社、2013年、81-102頁。

首藤明和、「日中家族制度比較研究 親密圏の再思考与再構想」首藤明和・王向華・宋金文編『中日家族研究』浙江大学出版社、2013年、401-428頁。

森本一彦「仏教寺院与家」首藤明和・王向華・宋金文編『中日家族研究』浙江大学出版、2013年、103-126頁。

福田恵、「日本社会における地方的世界 山間部と旧町場からみた『但馬』」藤井勝・高井康弘・小林和美編『地方的世界の社会学』晃洋書房、2013年、74-97頁。

福田恵、「ラオス北部集落における農村都市關係の形成過程 親族網の派生と地縁の再創出」藤井勝・高井康弘・小林和美編『地方的世界の社会学』晃洋書房、2013年、241-261頁。

〔その他〕

ホームページ等

「高野文化圏研究会」

(<http://koyabunkaken.blogspot.jp/>)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

首藤 明和 (SHUTO TOSHIKAZU)

兵庫教育大学・学校教育研究科・准教授
研究者番号：60346294

(2) 研究分担者

森本 一彦 (MORIMOTO KAZUHIKO)

高野山大学・文学部・非常勤講師
研究者番号：20536578

福田 恵 (FUKUDA SATOSHI)

東京農工大学・共生科学技術研究科・講師
研究者番号：50454468

池本 淳一 (IKEMOTO JUNICHI)

早稲田大学・スポーツ科学学術院・助教
研究者番号：90586778